

企業DXを推進する指標の在り方に関する検討会

第2回 事務局説明資料

2025年3月

経済産業省 商務情報政策局 情報技術利用促進課

目次

1. 第1回検討会における各論点に関する議論の振り返り
2. 第1回検討会における合意内容の確認
3. 第2回検討会以降の論点の整理
4. 第2回検討会における論点
5. 今後のスケジュール

1. 第1回検討会における各論点に関する議論の 振り返り

第1回検討会における各論点に対する議論の振り返り（1/2）

指標を活用する 目的

- **DX推進指標は日本企業の維持存続や成長のため、DXに取り組む際に課題を確認するための手段**である。そのためには**対象や目的を明確**にし、企業が取り組むべきことを自ら考えてもらうような指標とすべきである。
- 経営者が自社のDXの取組を把握する際に指標に立ち返って、**DX認定の基準に合っているか、DX銘柄の評価基準に照らすとどうか、について確認できると良い**。そのため、DX推進指標を「DXを推進する企業は、最低限取り組むべき基準」と打ち出し、**デジタルガバナンス・コードやDX認定、DX銘柄が連動していく仕組みが重要**である。
- DXに取り組む企業の気づきの材料となり、「これからDXに取り組む」もしくは「DXに取り組んでいるが、課題が分からない」企業が使う指標であるべきである。DXの動き出しの部分や、DXの取組を始めたけど目的達成のためにどこに取り組むべきか、ということが見えるようになることが大切。客観的な目線で何が課題なのか、企業が「参考書」のように使えると良い。
- 事務局が提示した、**DX認定を目指す企業が課題の把握をする、DXによる企業価値向上を目指す企業が自社の取組を評価する、という目的が良い**。DX認定は、デジタルガバナンス・コードに準拠する企業の取組みを認定する制度であり、DX推進指標はDX認定を目指すためのツールになると良い。
- デジタイゼーション、デジタライゼーション、DXの段階に合わせた指標となることが理想ではないか。

第1回検討会における各論点に対する議論の振り返り（2/2）

指針の方針

- デジタルガバナンス・コードに基づいて、DX推進指標を構成すべきである。
- デジタルガバナンス・コードは経営者に対して取り組むべき事項をまとめたものであるが、**DX推進指標はDX部門長やCIO等が、DXに取り組む際の指標であるべき**である。
- 「変化し続けないと生き残ることが出来ない」といったニュアンスをDX推進指標で出せると良い。

指針の構成

- 大企業や中小企業などの企業規模、DX推進のレベル毎に提供するなど複雑にはしない方が良く、**指標としては、シンプルで統一的なものが良い**。ただし、一般化しすぎず、重要な部分は網羅的に入れておくべきである。
- 指標の構成は、デジタルガバナンス・コードに近づけるよう整理すべき。その上で、**DXの進捗状況に応じてDX推進指標を切り分ける考え方がベースになると良い**。
- デジタルガバナンス・コードは特に経営を意識しており、ITシステムの記述は少ない。デジタルガバナンス・コードと整合性を取るとしても、**必ずしもデジタルガバナンス・コードと同じ書き方である必要はなく、ITシステムで取り組むべきことを過度に削ぎ落さないよう考慮すべき**である。
- 企業によってDXに取り組む目的が異なることから、**指標において様々な解釈や読み替えが企業によってできると良い**。
- 成熟度レベルは良くできているが、グローバル視点などは、大半の中堅・中小企業にとって関係ないと思われるレベルであり、選択肢にあるだけで回答を避けられるものである。**成熟度レベルはどのレベルでも適用できるものであり、きちんと解釈ができるようにしておかなければならない**。

2. 第1回検討会における合意内容の確認

第1回検討会における合意内容の確認

- DX推進指標の改訂において、第1回検討会を踏まえて、下記の方方向性で合意したとの理解であるため、本日は下記を前提とした上で議論を進めて頂きたい。

全体の方向性

- 指標は、**DX推進施策全体の政策の連続性も鑑みて検討を進めていくこと**。そのために、政策の連続性から逸脱するものにはしないこと。

指標を活用する目的

- 指標は、**①企業に気づきを与えること、及び②企業が抱える問題を深く知ること**、をそれぞれ目的として改訂を進めること。
- その上で、政策の連続性も鑑みて、**①DX認定を目指す企業、及び②より先進的なDXの取組を目指す企業（DX銘柄・DXセレクションを目指す企業）**をターゲットとしていくこと。

指標の方針

- 指標の内容は、DX推進施策の考えとして共通的な**デジタルガバナンス・コードに沿ったもの**にしていくこと。

指標の構成

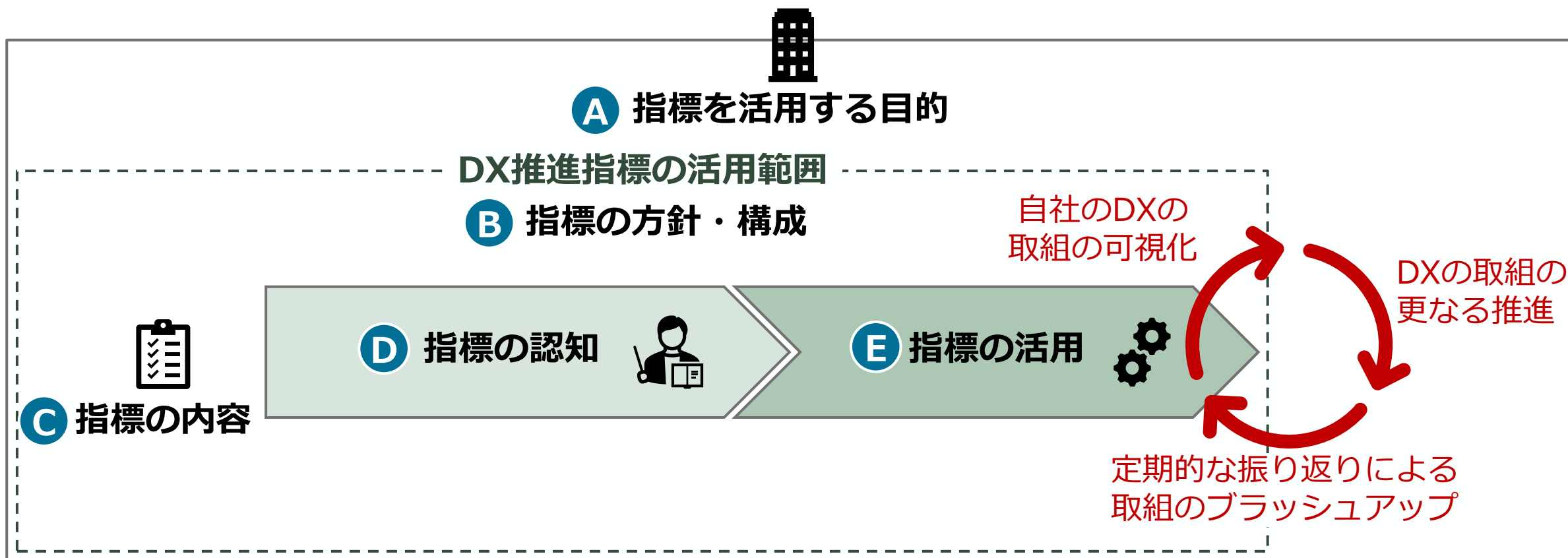
- 指標の構成は、**企業規模では分類しないこと**。

3. 第2回検討会以降の論点の整理

DX推進指標検討に係る課題と論点の考え方（再掲）

- 企業DX推進におけるDX推進指標の活用と理想像をベースとして課題と論点を整理。

企業DX推進におけるDX推進指標の活用と理想像



DX推進指標検討に係る課題と論点（案）：サマリー

課題		サブ課題	論点
総論	A 指標を活用する目的	a-1 ▶ 指標の活用目的が定まっていない	▶ DX推進指標を活用する目的をどのように考えるべきか
	B 指標の方針・構成	b-1 ▶ DX経営のための指標と必ずしもなっていない	▶ DX推進指標の内容を決めるための方針をどのように考えるべきか
		b-2 ▶ 全ての企業が一つの指標を活用することになっており、使いづらさを感じる企業が多い	▶ DX推進指標の構成をどのように考えるべきか
各論	C 指標の内容	c-1 ▶ 特に中小企業にとっては回答がしづらい設問もあり、全ての設問を回答することが難しい	▶ 設問の設定方法についてどのように考えるべきか
		c-2 ▶ 0～5の6段階としている成熟度レベルが企業にとって分かりにくい	▶ 設問の成熟度レベルについてどのように考えるべきか
		c-3 ▶ 定量指標の記入が難しく、活用することができていない	▶ 定量指標の有無についてどのように考えるか
	D 指標の認知	d-1 ▶ 企業や支援機関に対してDX推進指標の認知拡大に向けた取組が不十分である	▶ 経済産業省やIPAとしてDX推進指標の認知拡大に向けた取組をどのように行っていくべきか
		d-2 ▶ 他の政策との連携が少なく、他の政策を入口とした指標認知が出来ていない	▶ どういった政策と連携をすべきであると考えるか
	E 指標の活用	e-1 ▶ 他社でのDX推進指標の活用事例が分からず、どのように活用すれば良いか、が分からない	▶ DX推進指標の事例をどのように発信していくべきか
		e-2 ▶ DX推進指標の提出方法がエクセルとなっており、回答時に活用がしづらい	▶ DX推進指標の提出方法をどのように考えるべきか
		e-3 ▶ 自社のDXの取組状況が相対的に把握することのできるベンチマークを活用しきれていない	▶ 企業が自社のDXの取組に活用できるベンチマークとしてどのようにあるべきか

本日も議論頂きたい論点：指標の内容

課題		サブ課題	論点
総論	A 指標を活用する目的	a-1 ▶ 指標の活用目的が定まっていない	▶ DX推進指標を活用する目的をどのように考えるべきか
	B 指標の方針・構成	b-1 ▶ DX経営のための指標と必ずしもなっていない	▶ DX推進指標の内容を決めるための方針をどのように考えるべきか
		b-2 ▶ 全ての企業が一つの指標を活用することになっており、使いづらさを感じる企業が多い	▶ DX推進指標の構成をどのように考えるべきか
各論	C 指標の内容	c-1 ▶ 特に中小企業にとっては回答がしづらい設問もあり、全ての設問を回答することが難しい	▶ 設問の設定方法についてどのように考えるべきか
		c-2 ▶ 0～5の6段階としている成熟度レベルが企業にとって分かりにくい	▶ 設問の成熟度レベルについてどのように考えるべきか
		c-3 ▶ 定量指標の記入が難しく、活用することができていない	▶ 定量指標の有無についてどのように考えるか
	D 指標の認知	d-1 ▶ 企業や支援機関に対してDX推進指標の認知拡大に向けた取組が不十分である	▶ 経済産業省やIPAとしてDX推進指標の認知拡大に向けた取組をどのように行っていくべきか
		d-2 ▶ 他の政策との連携が少なく、他の政策を入口とした指標認知が出来ていない	▶ どういった政策と連携をすべきであると考えるか
	E 指標の活用	e-1 ▶ 他社でのDX推進指標の活用事例が分からず、どのように活用すれば良いか、が分からない	▶ DX推進指標の事例をどのように発信していくべきか
		e-2 ▶ DX推進指標の提出方法がエクセルとなっており、回答時に活用がしづらい	▶ DX推進指標の提出方法をどのように考えるべきか
		e-3 ▶ 自社のDXの取組状況が相対的に把握することのできるベンチマークを活用しきれていない	▶ 企業が自社のDXの取組に活用できるベンチマークとしてどのようにあるべきか

指標の内容に関するこれまでの合意内容及び各論点の方向性

第1回検討会での合意内容（検討の前提）

- | | |
|-----------|---|
| 全体の方向性 | ➤ 指標は、DX推進施策全体の政策の連続性も鑑みて検討を進めていくこと。そのために、政策の連続性から逸脱するものにはしないこと。 |
| 指標を活用する目的 | ➤ 指標は、①企業に気づきを与えること、及び②企業が抱える問題を深く知ること、をそれぞれ目的として改訂を進めること。
➤ その上で、政策の連続性も鑑みて、①DX認定を目指す企業、及び②より先進的なDXの取組を目指す企業（DX銘柄・DXセレクションを目指す企業）をターゲットとしていくこと。 |
| 指針の方針 | ➤ 指標の内容は、DX推進施策の考えとして共通的なデジタルガバナンス・コードに沿ったものにしていくこと。 |
| 指針の構成 | ➤ 指標の構成は、企業規模では分類しないこと。 |

第2回検討会における論点と方向性

論点①：設問の設定方法	論点②：設問の成熟度レベル（具体的なイメージ含む）	論点③：定量指標の有無
	設問の分類	成熟度レベルの段階
案1 デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をそのまま設問として採用する	設問を（A）DX認定レベル（①認定基準をベース）、（B）DX銘柄・セレクションレベル（②望ましい方向性をベース）に分ける	案1 定量指標を設定する
案2 デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をブレイクダウンした形で設問をそれぞれ設定する	ターゲットに関わらず一律で設問を設定する	案2 定量指標は設定しない

4. 第2回検討会における論点

論点①：設問の設定方法についてどのように考えるか

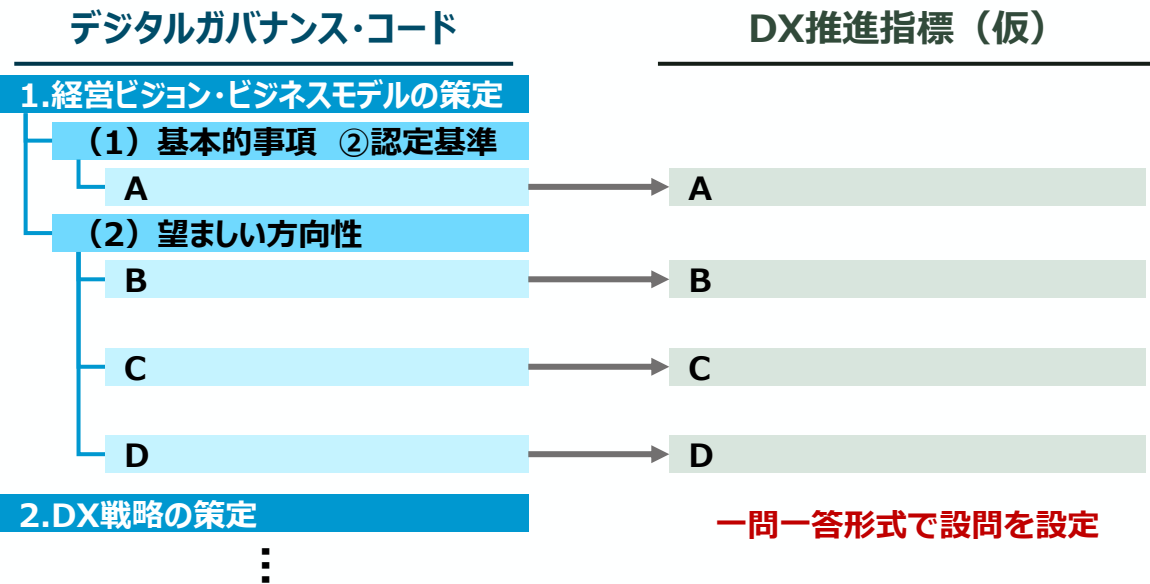
検討
の
前提

- ターゲットを①DX認定を目指す企業、及び②より先進的なDXの取組を目指す企業（DX銘柄・DXセクションを目指す企業）、指標の内容としてデジタルガバナンス・コードを基にすることを鑑み、設問は「デジタルガバナンス・コードにおける認定基準及び望ましい方向性」をベースとしたものとする。

設問の設定方法に関する案

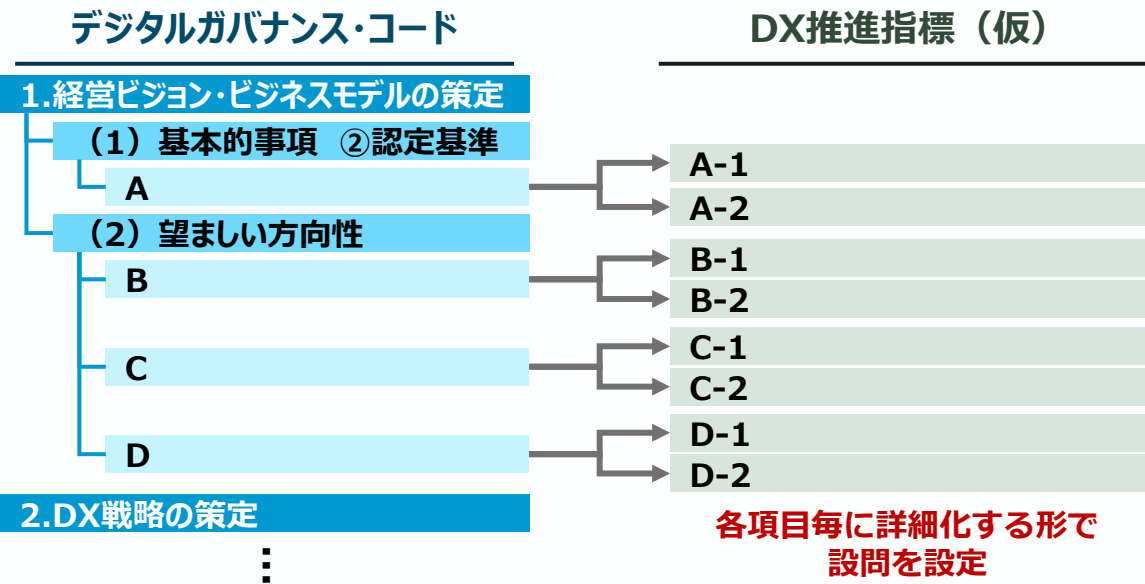
案1

- デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をそのまま設問として採用する



案2

- デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をブレイクダウンした形で設問をそれぞれ設定する



論点①：案2における具体的な設問の考え方（案）

- 案2では、デジタルガバナンス・コードのそれぞれの内容を分解して設問を立てることを想定。

案2における設問の考え方（案） （例：1. 経営ビジョン・ビジネスモデルの策定）

デジタルガバナンス・コード

DX推進指標（仮）

(1) 基本的事項 ②認定基準

A：データ活用やデジタル技術の進化による社会及び競争環境の変化の影響も踏まえた経営ビジョン及びビジネスモデルの方向性を公表していること。

- A-1：データ活用やデジタル技術の進化による社会及び競争環境の変化が自社にもたらす影響について、認識しているか。
- A-2：A-1の影響も踏まえた、DX推進に向けた経営ビジョンを策定・公表しているか。
- A-3：経営ビジョンの実現に向けたビジネスモデルの方向性を示し、公表しているか。

(2) 望ましい方向性

B：データ活用やデジタル技術の進化による社会及び競争環境の変化が自社にもたらす影響も踏まえ、経営方針および経営計画において、DXの推進に向けた経営ビジョンを策定している。

B-1：データ活用やデジタル技術の進化による社会及び競争環境の変化が自社にもたらす影響も踏まえ、経営方針および経営計画において、DXの推進に向けた経営ビジョンを策定しているか。

C：既存ビジネスモデルの強みと弱みが明確化されており、その強化・改善にDX戦略や施策が大きく寄与している。

- C-1：既存ビジネスモデルの強みと弱みが明確化されているか。
- C-2：既存ビジネスモデルの強化・改善にDX戦略や施策が大きく寄与しているか。

D：多様な主体とデジタル技術でつながり、データや知恵などを共有することによって、企業間連携を行い、革新的な価値を創造している。

- D-1：多様な主体とデジタル技術でつながり、データや知恵などの共有をしているか。
- D-2：データや知恵などの共有により、企業間連携を行い、革新的な価値を創造しているか。

(参考) DX銘柄・DXセレクション選択式項目における考え方の違い

- DX銘柄及びDXセレクションにおいては企業特性も鑑みつつも、デジタルガバナンス・コードにおける「望ましい方向性」を基に選択式項目をそれぞれ策定。



上場企業（大企業中心）が対象（全54問）

1. 経営ビジョン・ビジネスモデルの策定（6問）

2. DX戦略の策定（6問）

3-1. 組織づくり（12問）

3-2. デジタル人材の育成・確保（6問）

3-3. ITシステム・サイバーセキュリティ（11問）

4 成果指標の設定・DX戦略の見直し（7問）

5 ステークホルダーとの対話（6問）



中堅・中小企業が対象（全45問）

1. 経営ビジョン・ビジネスモデルの策定（4問）

2. DX戦略の策定（5問）

3-1. 組織づくり（10問）

3-2. デジタル人材の育成・確保（6問）

3-3. ITシステム・サイバーセキュリティ（11問）

4 成果指標の設定・DX戦略の見直し（4問）

5 ステークホルダーとの対話（5問）

論点①：各案の検討材料及び事務局案

各案の検討材料（それぞれの案の比較）

↗：メリット、↘：デメリット、をそれぞれ表す

案1

デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をそのまま設問として採用する

- ↗ 最大でデジタルガバナンス・コードに記載の内容の（認定基準：9問、望ましい方向性：55問）となるため、**案2と比べると設問数を抑えることができる可能性が高い。**
- ↗ また、既にデジタルガバナンス・コードに記載の事項が設問に昇華することになるため、**各設問は比較的容易に設定していくことが可能。**
- ↘ 一方、デジタルガバナンス・コードに記載の内容をブレイクダウンした形ではなく、**それぞれの項目において、具体的にどういった点が足りないか、に関する深い理解を促進することができない可能性。**

案2

デジタルガバナンス・コードにおける認定基準・望ましい方向性に記載の内容をブレイクダウンした形で設問をそれぞれ設定する

- ↗ それぞれの設問に回答することで、**デジタルガバナンス・コードのDX認定基準及び望ましい方向性に記載の内容を達成するための自社の立ち位置を深い理解を促進させることができる。**
- ↗ また、分類する方法によっては、**一定程度統一的な基準を基にして、設問を分類・設定することができるものと思料**（具体的な分類の考え方については後述）。
- ↘ 一方で、一定程度抑えることは可能であるものの、**設問数は案1と比べると多くなる可能性が高い。**

事務局案

- 指標はそれぞれ想定するターゲット企業が目標（DX認定・DXセレクション・DX銘柄）のレベルに到達するために**自社の現状を可能な限り詳細に把握するためのものにすべき**。また、設問はシンプルに設定することでより分かりやすく、かつ、設問毎のそれぞれのレベル設定も容易になることが想定される。
- 以上より、**事務局として「案2」が良いのではないか**、と思うがいかがか。
- その上で、仮に「案2」の方向性である場合、設問数は当然に多くなることが予想されるが、内容の重複や、重要度等に応じて調整を図ることとし、**具体的には第3回以降の検討会において事務局にて案を提示した上で議論する形でいかがか。**

論点②：設問の成熟度レベルについてどのように考えるか

検討
の
前提

- 指標は、①企業に気づきを与えること、及び②抱える問題を深く知ること、をそれぞれ目的として改訂を進めていく。
- 政策の連続性も鑑みて、本指標は①DX認定を目指す企業、及び②より先進的なDXの取組を目指す企業（DX銘柄・DXセクションを目指す企業）をターゲットとする。

設問毎の成熟度レベルに関する案

案1

設問の
分類

設問を（A）DX認定レベル（①認定基準をベース）、（B）DX銘柄・セクションレベル（②望ましい方向性をベース）に分ける

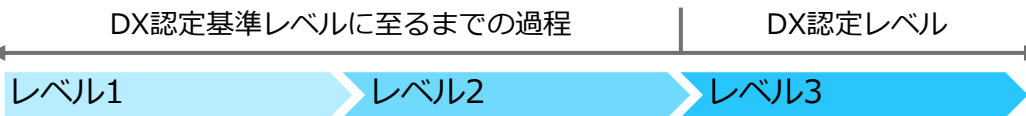
案2

ターゲットに関わらず一律で設問を設定する

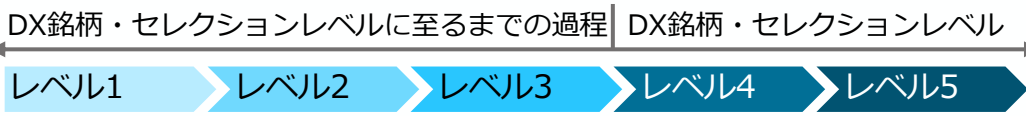
- 設問の分類ごとに成熟度の段階を設定する

（1）基本的事項に紐づく設問に適用される成熟度レベル

成熟度
レベル
の段階



（2）望ましい方向性に紐づく設問に適用される成熟度レベル



具体的な成熟度レベルの考え方については次ページ以降で検討

- （A）DX認定レベル、（B）DX銘柄・セクションレベルにおいて到達すべきポイントを設定する

設問に関わらず統一的に適用される成熟度レベル



具体的な成熟度レベルの考え方については次ページ以降で検討

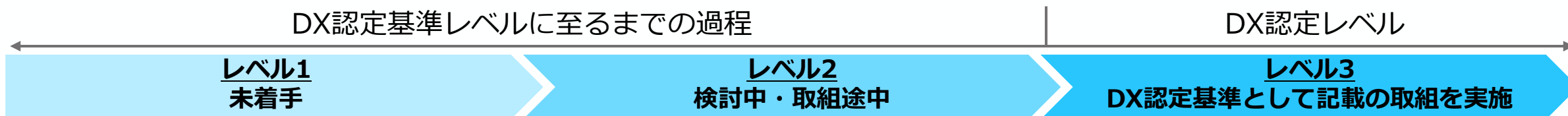
論点②：案1における具体的な成熟度レベルの考え方

- 案1における具体的な成熟度のイメージとして例えば下記が考えられるが、いかがか。

(1) 基本的事項に紐づく設問に適用される成熟度レベル

【考え方】

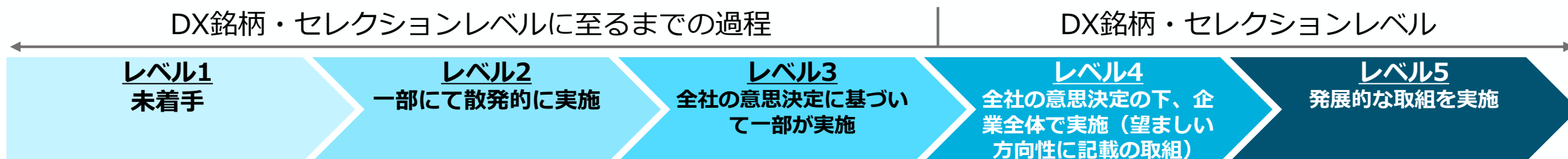
- 最高到達点を「DX認定基準として記載の取組を実施」していることとする一方、DX認定基準については取組を行っているか否か、で判断されるものであるため、**未着手も含めて3段階にて設定**



(2) 望ましい方向性に紐づく設問に適用される成熟度レベル

【考え方】

- 望ましい方向性より高次の取組を行っている事例もDX銘柄・DXセレクション受賞企業を中心に多いため、最高到達点を「望ましい方向性の取組の先の発展的な取組をしている」ことに設定し、その前段を「望ましい方向性に記載の取組を実施」していることとして設定
- その上で、一部門が自発的に取組を実施しているケース、全社の意思決定は存在しつつも一部が取組を実施しているケース（全社的な取組にまでは発展していないケース）がその過程においてそれぞれ想定されるため、**未着手も含めて5段階に設定**



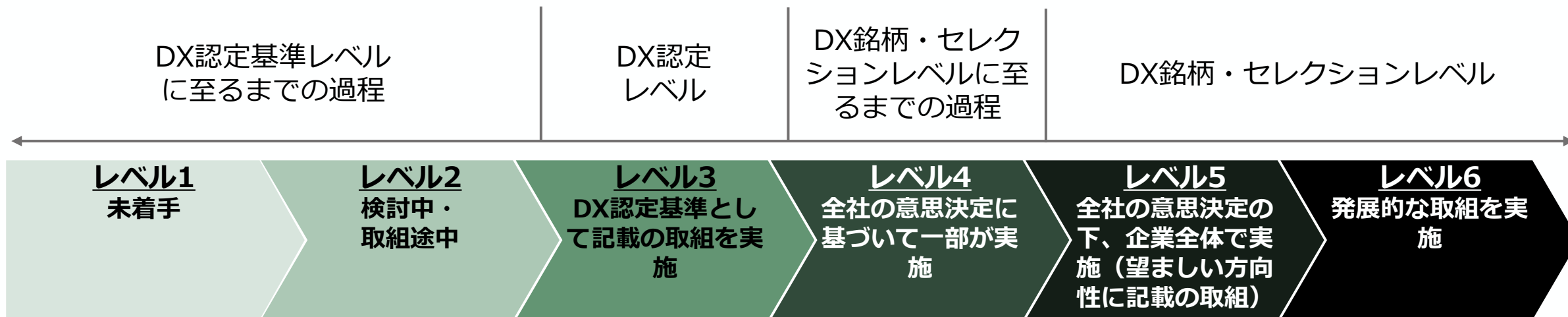
論点②：案2における具体的な成熟度レベルの考え方

- 案2における具体的な成熟度のイメージとして例えば下記が考えられるが、いかがか。

設問に関わらず統一された成熟度レベル

【考え方】

- 案1におけるDX認定レベル及びDX銘柄・セクションレベルの設問を統合した形で設定
- DX認定レベルは全社の意思決定までは取り組んでいる状態を指すため、DX認定レベルとして設定するレベル3の次の**レベル4**においては、**全社の意思決定は存在しつつも一部が取組を実施しているケース（全社的な取組にまでは発展していないケース）**を設定。その上で、未着手も含めて6段階に設定



(参考) 成熟度レベルに関する主なヒアリング内容

- 現行のDX推進指標においては、未着手の段階から、グローバル競争に勝ち抜くことが出来るレベルまで設定されているが、事業者からは分かりにくいという声も存在。

成熟度レベルに関する主なヒアリング内容

- 成熟度評価は各社の主観的な診断結果であり、**定性指標の各項目の判断根拠・確認方法を具体的に示すことが必要**ではないか
- 成熟度の判断が難しく、成熟度レベルの段階（レベル0～5）の分け方は工夫が必要。**特にレベル5の基準はDXの成熟度とは必ずしも関連がないように感じられる**
- 活動計画にグローバルな取組が入っているものは5を付けられるが、国内に閉じている活動は4が最高になってしまう
- **そもそもグローバル企業のため4と5で評価の境目がなく、弱い強いという観点で評価している。グローバルの観点は別の軸を立てた方がいいのではないか**
- **成熟度レベルで「5」を取るにはグローバルである必要があるが、特に中小企業にとって、グローバルは難しい**

特にレベル5（グローバル市場におけるデジタル企業）が分かりにくい、との声が存在

論点②：各案の検討材料及び事務局案

各案の検討材料（それぞれの案の比較）

↗：メリット、↘：デメリット、をそれぞれ表す

案1

設定するレベル毎に成熟度の段階を設定する

- ↗ 設定するレベル毎に成熟度の段階を設定することで、企業にとって、DX認定レベル、DX銘柄・DXセクションレベルそれぞれにおいて、自らがどこに位置しているのか、こういった要素が足りていないのか、が分かりやすい。
- ↗ また、設定するレベル毎に設問を分けることで、より政策の連動性が分かりやすくなる。
- ↘ 一方で、DX認定レベル、DX銘柄・DXセクションレベルの成熟度の考え方をそれぞれ変えた形で設定するため、全体として煩雑になる可能性は存在。

案2

統一的な成熟度レベルの中で
(A) DX認定レベル、(B)
DX銘柄・セクションレベルにお
いて到達すべきポイントを設定
する

- ↗ 設問自体はデジタルガバナンス・コードにおけるDX認定基準及び望ましい方向性をベースとして設定するものの、最終的には統一した設問表となるため、シンプル。
- ↘ 一方、それぞれの設問について統一した成熟度レベルを適用する際に、DX認定基準をベースにした設問については、DX銘柄・セクションレベルの取組を、望ましい方向性をベースとした設問についてはDX認定レベルの取組をそれぞれ具体的にどのように設定するか、の検討が非常に困難になることが予想される。

事務局案

- 案2の場合、設問の構成はよりシンプルなものとなるが、それぞれの設問におけるレベル毎の取組の設定は非常に難しい。
- 一方、案1の場合、企業として目指すべきそれぞれのレベル毎に、それぞれの段階において自社がどのレベルに位置しているか、がより分かりやすくなるものと思料。
- 以上より、具体的な設問設定の過程において、重複の排除等も考慮した上で、事務局として「案1」が良いのではないか、と思うがいかかが。

(参考) 現行のDX推進指標における成熟度レベルの考え方

- 現行のDX推進指標においては、未着手（レベル0）からグローバル市場におけるデジタル企業（レベル5）まで6段階に分けて成熟度レベルが設定されている。

現行のDX推進指標の成熟度レベル及び特性

レベル0 未着手	➤ 経営者は無関心か、関心があっても具体的な取組に至っていない
レベル1 一部での散発的实施	➤ 全社戦略が明確でない中、部門単位での試行・実施にとどまっている
レベル2 一部での戦略的实施	➤ 全社戦略に基づく一部の部門での推進
レベル3 全社戦略に基づく部門横断的推進	➤ 全社的な取組となっていることが望ましいが、必ずしも全社で画一的な仕組みとすることを指しているわけではなく、仕組みが明確化され部門横断的に実践されていることを指す
レベル4 全社戦略に基づく持続的实施	➤ 定量的な指標などによる持続的な実施 ➤ 持続的な実施には、同じ組織、やり方を定着させていくということ以外に、判断が誤っていた場合に積極的に組織、やり方を変えることで、継続的に改善していくことも含まれる
レベル5 グローバル市場におけるデジタル企業	➤ デジタル企業として、グローバル競争を勝ち抜くことのできるレベル ➤ レベル4における特性を満たした上で、グローバル市場でも存在感を発揮し、競争上の優位性を確立している

(参考) CMMI (Capability Maturity Model Integration)

- CMMIはケイパビリティやマチュリティそれぞれの段階を定義、その上で現状のケイパビリティやパフォーマンスを理解し、事業を最適化する助けとなるモデルとして開発された指標。

CMMIの成熟度レベル	
Capability Levels	Maturity Levels
レベル0 Incomplete ➤ 取組が未完全で、目指す取組に達していない	レベル0 Incomplete ➤ 取組が未完全
レベル1 Initial ➤ 全ての項目それぞれについてプラクティスまでは確立されていない	レベル1 Initial ➤ プロセスが個人の努力に依存。また、事業の遅延や予算超過がしばしば発生する
レベル2 Managed ➤ 全ての項目それぞれについてのプラクティスがシンプルでありながらも確立されている	レベル2 Managed ➤ プロセスマネジメントが機能し、プロジェクトの立案・計測・制御が可能
レベル3 Defined ➤ プロジェクトや仕事の特徴に合わせて組織の基準やティラーメイドを使っている	レベル3 Defined ➤ 標準的なプロセスが定義され、各プロジェクトのプロセスが画一的な考えの下確定し、実行される
	レベル4 Quantitatively Managed ➤ データドリブンな組織となっており、定量的な指標によりパフォーマンスが管理され、改善を図ることができる
	レベル5 Optimizing ➤ 着実かつ革新的な変化により体系的にプロセスを改善し、プロセスの最適化や継続的なパフォーマンスの向上に取り組んでいる

論点③：定量指標の有無についてどのように考えるか

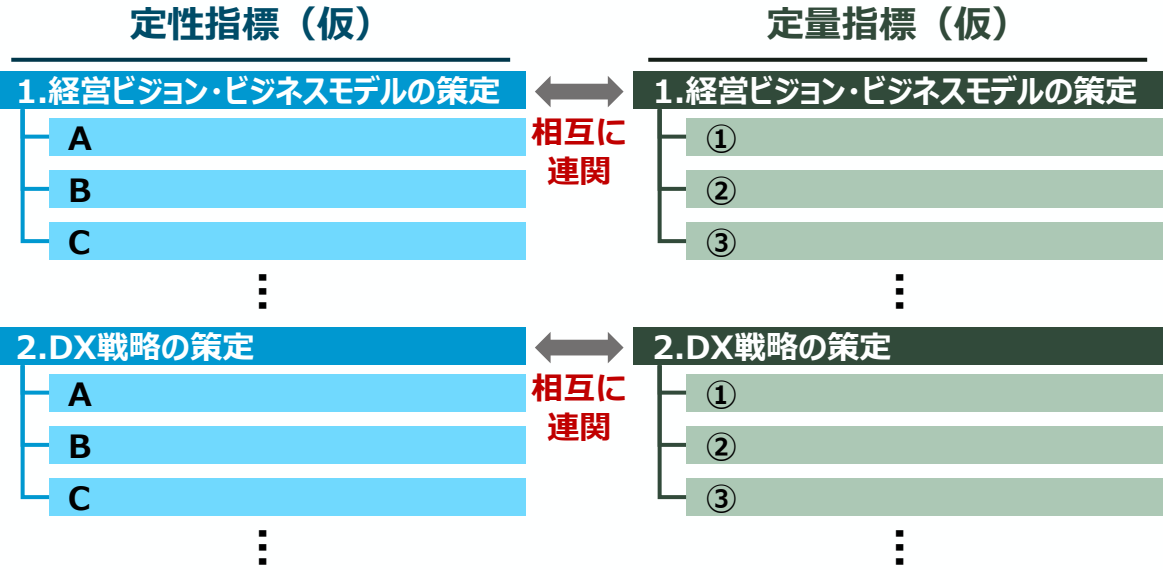
検討
の
前提

- 現行のDX推進指標においては、定性指標のみならず、定量指標についても設定。
- 一方、定量指標はあくまで任意での提出を求めているものであり、ベンチマークレポートにおいても定量指標を用いた相対評価は提供していない状況。

定量指標の設定有無に関する案

案1

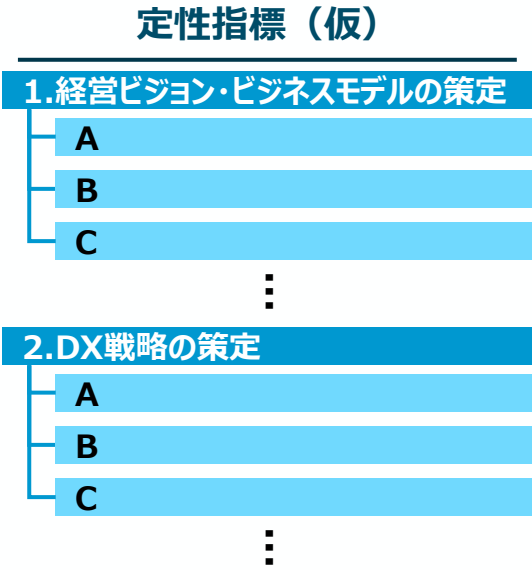
- 定量指標を設定する



デジタルガバナンス・コードと連動した定性指標・定量指標を設定

案2

- 定量指標は設定せず、定性指標のみを設定する



デジタルガバナンス・コードと連動した定性指標のみを設定

論点③：検討材料及び事務局案

4. 成果指標の設定・DX戦略の見直し (デジタルガバナンス・コード)

(1) 基本的事項

① 柱となる考え方

- 企業は、DX戦略の達成度を測る指標を定め、指標に基づく成果についての自己評価を行う。

② 認定基準

- DX戦略の達成度を測る指標について公表していること。

※ 指標については、定量指標のほか、達成したか否かが判断できる定性指標も含まれる。

(2) 望ましい方向性

- DX戦略・施策の達成度は、実施している全ての取組に定量・定性問わず、KPI（重要な成果指標）を設定し、評価されている。

※ 関連箇所のみ抜粋

定量指標に関する主なヒアリング内容

- DX推進指標を活用する上で**定量指標はマイルストーンを立てるきっかけ**になった。
- 定量指標は自由に書けるのはいいが、説明欄の内容について製造業に寄っているところがあり、**サービス業だと記入が難しいと感じる**。
- 定量指標の記入が難しく、活用できていない。**可視化しようとしたが、定義付けが難しい**。
- ベンチマークレポートに、定性指標の情報しか示されていないため、**定量指標についても集計した結果等を公開頂きたい**。他社事例としてこういった結果のものがあるか戦略を検討するうえで参考にしたい。

事務局案

- デジタルガバナンス・コードにおけるDX認定の基準（4. 成果指標の設定・DX戦略の見直し）において「指標については、定量指標のほか、達成したか否かが判断できる定性指標も含まれる。」しており、**DX戦略の達成度を測る観点から、定量指標も重要**。そのため、**事務局として「案1」が良いのではないか**、と思うがいかがか。
- 一方、**現状のDX推進指標における定量指標は回答しづらい、という声も多くある**。また、ベンチマークレポート等により自社の相対的な立ち位置が分かるように開示もされておらず、**どのような定量指標を設定するか、また、どのように定量指標を活用していくべきか、を検討していくことが今後必要**（具体的には第3回検討会以降で議論）。

(参考) 現行のDX推進指標における定量指標

3.3 定量指標の考え方 情報処理推進機構「『DX推進指標』とそのガイダンス」より抜粋

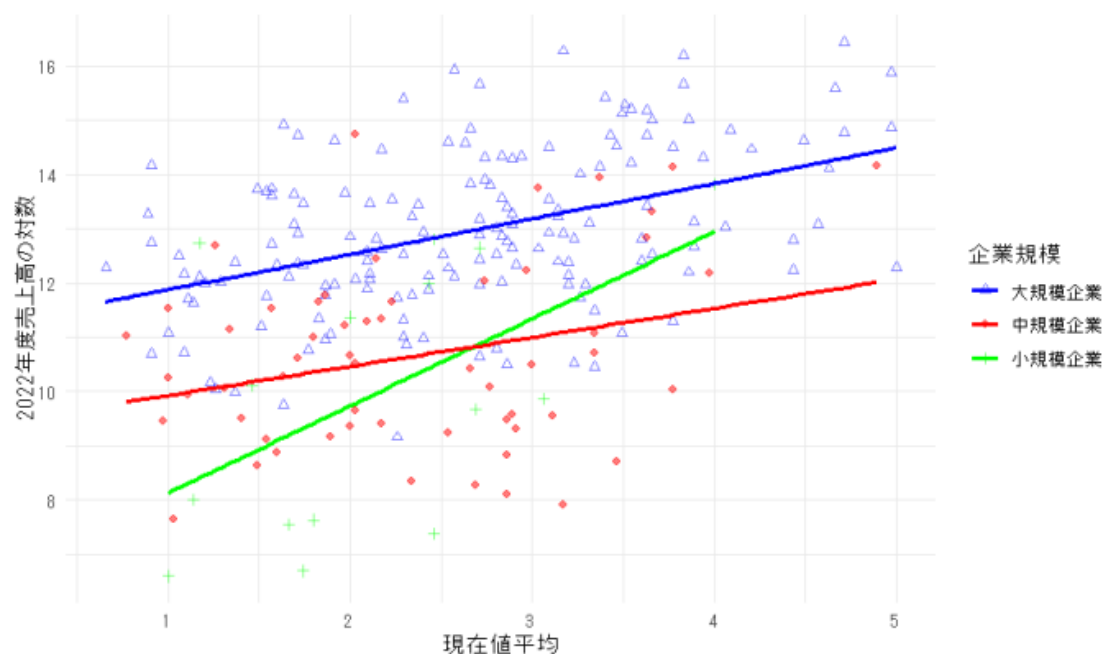
「DX 推進の取組状況」については、例えば、意思決定のスピード向上や新規顧客・サービスの拡大に関する指標など、DX の実行によって経営にもたらされる変化を反映できるものについていくつか事例を用意しているが、基本的には、自社が DX によって伸ばそうとしている定量指標を**自ら選択して算出するとともに、例えば、3 年後に達成を目指す当該指標に関する数値目標を立て、進捗管理を行っていくといった活用方法を想定**している。また、「IT システム構築の取組状況」については、基本的に企業単位での評価を想定しているため、自社で対象とするシステムやサービス、データをいくつか特定した上で回答することを想定している。

大分類	中分類	小分類	項目
DX推進の 取組状況	DXによる競争力強化の 到達度合い	研究＆開発	製品開発スピード
		マーケティング	新規顧客獲得割合
		調達・購買	支出プロセスにおける効率性
		会計・経理	決算処理スピード
			Cash Conversion Cycle
			フォーキャストサイクルタイム
	DXの取組状況	デジタルサービス	企業全体に占めるデジタルサービスの割合 [%]
			デジタルサービス全体の利益 [円]
			デジタルサービスへの投資額 [円]
			デジタルサービスに従事している従業員数 [人]
			新サービスを利用する既存顧客の割合 [%]
		デジタルプロジェクト	DXのためのトライアルの数 [件]
		業務提携	DXのための業務提携の数 [件]
		デジタル化	業務プロセスのデジタル化率 [%]
ITシステム構築の 取組状況	ITシステム構築の取組状況	予算	ラン・ザ・ビジネス予算とバリュー・アップ予算の比率 [%]
		人材	DX人材（事業）の数 [人]
			DX人材（技術）の数 [人]
			DX人材育成の研修予算 [円]
		データ	データ鮮度 [リアルタイム／日次／週次／月次]
		スピード	サービス改善のリードタイム [日]
			サービス改善の頻度 [回]
		アジリティ	アジャイルプロジェクトの数 [件]

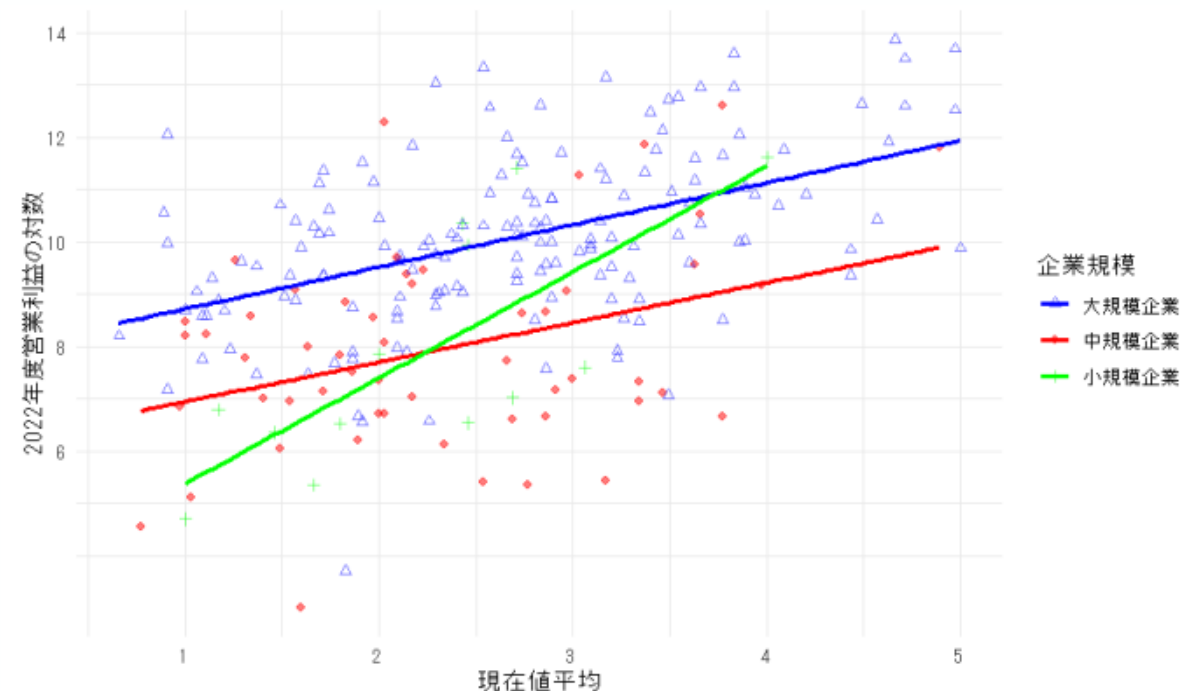
(参考) DX推進指標の成熟度と財務指標との関係

- DX推進指標における成熟度と財務指標の関係を分析すると、成熟度と売上高、営業利益共に有意な正の相関が見られる結果となり、特に小規模企業において顕著。

DX推進指標と売上高



DX推進指標と営業利益



売上高、営業利益共に小規模企業において特に正の相関が見られる

(注) 2023年度にDX推進指標の提出のあった企業のうち、2022年度の売上高及び営業利益を外部から取得することが出来た235社（大規模企業：161社、中規模企業：57社、小規模企業：15社）を対象に、DX推進指標の現在値を説明変数とし、財務指標を目的変数とした回帰分析を実施。

(出典) IPA「DX推進指標 自己診断結果 分析レポート（2023年版）」を基に作成。

5. 今後のスケジュール

今後の検討スケジュール（案）

検討会日程	アジェンダ
第1回 2025年1月16日	➤ DX推進指標の振り返りと現状の活用状況の共有 ➤ DX推進指標に係る課題と論点の提示 ➤ 総論（指標を活用する目的、指標の方針・構成）に関する議論
第2回 2025年3月28日 （本日）	➤ 総論に関する議論を踏まえ、指標の内容について議論
第3回 2025年4月下旬	➤ 第2回までの議論を踏まえ、具体的な指標の中身について議論
第4回 2025年5月下旬	➤ 第3回までの議論を踏まえ、具体的な指標の中身について議論
第5回 2025年6月下旬	➤ 第4回までの議論を踏まえ、具体的な指標の中身について議論 ➤ 指標の認知及び活用等について議論